



医学生・初期研修医のための

JUA Newsletter

for Next Uro-Generation

6

FEB. 2021

Contents

● 医学生・研修医へのメッセージ

若い人へのメッセージ

思えばここまでよく来たもんだ

神戸大学大学院医学研究科
腎泌尿器科学分野 教授
藤澤 正人

若い人へのメッセージを書くよう依頼され、還暦をようやく過ぎた私にもとうとうそのような役が回ってきたのかと思った次第です。

さて、いざ何を書くかと考えたとき研修医の方々にお役に立てるような内容になるかどうかわかりませんが、この愚鈍な自分が泌尿器科医を選んで約35年歩んできた道のりを振り返ってみて何か皆さんへのメッセージになればと思い筆を執りました。

1984年に神戸大学を卒業した後、神戸大学の泌尿器科学



教室(当時、故石神襄次教授)で研修を開始しました。2年目、大学院に入学しましたが、そのまま泌尿器科の臨床に従事し、一年が過ぎました。この年、3代目の守殿貞夫教授が就任されました。大学院の2年目になり、研究テーマとして石神先生のライフワークでもあった精子形成障害の機序の解明に取り組むことになりましたが、どのようにアプローチするかは暗中模索の状況でした。そのなかで私にヒントを与えてくれた一つの論文がありました。その論文が取り上げていた酵素活性を精巣でまず測ってみようと思い、見ず知らずの論文の著者に手紙を書きました。幸いにもお返事を頂き、アッセイ系を作るために研究室に来てよといわれ非常に喜んだのを今でも覚えています。全くこの馬の骨かわからない泌尿器科医を快く受け入れてくださったのは、当時名古屋大学病態制御研究施設の吉田松年先生でした。結局、その先生の研究室に1年間お世話になり基礎研究を一から教えていただきました。名古屋近辺の全く知らない病院の当直のアルバイトも紹介して頂き生活費を稼ぎながら暮らしましたが、今思えば楽しい毎日でした。そこでの研究成果は、学位の論文となり、それ以外にも理学部の先生とも知り合うことができ共同研究により論文を出すこともできました。当時の私にとっては、理学部の先生との共同研究は、非常に興味深いものであり違った考え方を学ぶ良い機会になりました。その後、神戸に帰って一年間ほど関係病院で勤務したのち、当初から考えていた留学をしました。この時も、自ら海外に自分の研究にあった研究室のボスに手紙を書いて受け入れてくれるところを探しました。当時、ようやくFAXが使える時代でしたが、まだまだ手紙が主流の時代でした。日本から何のコネもなく、いくつかの論文があるだけで手紙を書いた人間を受け入れてくれるところなんかないだろうと思っていましたが、ある人を介して受け入れてくれる研究室が見つかりました。これも幸運でした。人生どこでどんな縁に巡りあえるかわかりません。留学での生活は、基礎的な研究を行いました。研究生活とともにニューヨーク、マンハッタン



の都会生活を家内とともに満喫しました。帰国前には、Cornell大学、Memorial Slone Kettering Cancer Center、Johns Hopkins大学、Mayo Clinic等の泌尿器科を2週間ずつ訪問し、手術見学をさせて頂き、非常に良い機会だったと思います。当時、開腹の前立腺全摘除術が日本でも盛んに行われるようになっていましたが、あの有名なPC WalshやRP Meyersの手術を見学することができ大変参考になりました。ここまでで思ったことは、迷っていても事は始まらない。どのような結果になるかは考えず、まずは行動に移してみれば何とかなると思うことが大事と思いました。私自身、留学までは手術を執刀する機会などほとんどなく、帰国し大学で勤務し始めた際、医師になって8年目、臨床能力は皆無といってもいいぐらいでした。その後、数年間は、若手の研究の指導と臨床に日夜没頭しました。今で言う長時間労働、時間外労働という言葉は、そこには存在せず、家族を顧みず大変迷惑をかけた時代と思います。今、振り返れば家内には感謝するほかありません。しかしながら、臨床に猛烈に取り組んだおかげで、数年後には術者として自分なりに自信をもって手術に臨むことができるようになりました。大学にいたら手術を学べない、上手くならない、決してそんなことはありません。手術を始める時期が遅くても決して焦ることはありません、ブランクがあっても焦ることはありません、じっくり構えて取り組めばいいと思います。また、そこで、思ったのは、手術が上手くなるのには数だけではない、ひとつひとつの手術に取り組む姿勢、謙虚な姿勢、感性、洞察力、貪欲さが大切であると思いました。また、この頃、研究に関しても、若い大学院生、医員の先生とともに論文を作成することができ充実した時を過ごせました。技術ばかり追い求めず是非、Surgeon Scientistを目指してください。多くのスタッフと切磋琢磨し、教室もスタッフが充実し、隆盛期を迎えたころ、私に次のステップがやってきました。川崎医科大学の教授選でした。当時の教授が退任の3年前ぐらいになっており、立候補するかどうするか迷いましたが、チャンスがあるならとにかく挑戦するという気持ちで立候補し、幸いにも教授として赴任することができました。川崎医科大学では、リーダーとして教室を自分の思いのまま、思うように臨床、研究に取り組みましたが、いろいろと壁にもぶちあたりました。しかし、私自身は多様な価値観を学ぶ良い機会であり、い

ろいろと勉強させて頂いたと思っています。その後、縁あって母校神戸大学に戻ることにになり、その際、ここで今から私が果たすべきことは何かと考えたときに研究、診療も大事ですが、やはり人材育成が一番、自分自身のことは二の次で人のために尽くすべしと思い、これまで教室を運営してきました。野村監督も、『財を遺すは下、仕事を遺すは中、人を遺すは上とする』という言葉を残しています。まさにその通りです。ここ数年は、病院長、研究科長など管理職としての業務が多くなっていますが、人を遺すということがいかに難しいかを痛感しながら、自己反省し研鑽する毎日です。いくつかの研究・開発テーマにも取り組みましたが、なかでも国産手術支援ロボットをメデイカロイドと連携して開発し、臨床応用できたことは大きな成果であり、喜びでもありました。この4月からは、学長に就任することになり、臨床の一線からは離れることとなりますが、今後、新たな目標に向かって自分の生き方を再度考えようと思っています。

留学の2年間と関係病院勤務の1年以外大学勤務という私のこれまでの医師人生がいいかどうかわかりませんが、人生いろんな岐路に立った時に『迷ったときは前に進めて頑張る』を自分に言い聞かせてきたことが、幸いにも私の生きる道を開いてきてくれたのかもしれない。すべてそのように実行できてはいませんが。今後、若い皆さんは、人生においていろんな場面に出くわせると思いますが、無意味な遠慮はいつか後悔するかもしれないと思って遠慮せず頑張って門を叩いてみてください。門を叩けば、いい答えが返ってきて、必ずお世話になる人が何人か出てくると思います。そして、人生、そこで得た人と人のつながりを大切に、人に感謝しながら悔いなく自分の思うように精一杯、未来を切り拓いてください。

人生は、夢と情熱と貪欲さ。

泌尿器科、万歳。

藤澤 正人

神戸大学大学院医学研究科
腎泌尿器科学分野 教授



ダイバーシティ/女性医師

泌尿器科女性医師の活躍

東京女子医科大学東医療センター
骨盤底機能再建診療部 教授・診療部長
泌尿器科 教授 (兼任)
巴 ひかる

「ダイバーシティ」とは「多様性」を意味し、国籍や性別や年齢などの違いを受け入れ、それぞれの多様な価値観や発想を活かすことを意味します。日本泌尿器科学会の「ダイバーシティ推進委員会」の前身は、2006年1月に設立された「女性泌尿器科医の会」です。当時は泌尿器科女性医師の割合が3.3%、総数約250名の時代でしたが、女性医師が順調に増え、2014年からは男性医師も加わり男女ともに支援するために「男女共同参画委員会」と生まれ変わり、2019年から現委員会となっています。今では泌尿器科女性医師は715名、全体の7.8%となり、30歳以下の泌尿器科医師の19.2%となりました(2020年12月8日現在)。

私は「女性泌尿器科医の会」の会長として7年間活動させていただきましたが、当初は召集された女性医師全員が、男女の区別なく医師としては同等に働いているという自負から、女性だけを集めたこの会の設立に否定的でした。しかし、必ずしもすべての女性医師が物理的・人的に働きやすい環境にあるわけではなく、それでも頑張る精神力を持っている人ばかりではないことから、学会総会での若手の登用、全国アンケート調査、託児所を設置し育児中の女性医師も学会参加しやすい環境整備をしました。今や私が入局した30年以上前と比べればダイバーシティという考え方が周知され、多くの女性医師が生き生きと働き、意見を述べ、学会でも発表する姿が増えたと思います。

本原稿のタイトルである“活躍”とは何か。という疑問が沸きました。私にとっては、2020年10月に会員数1800人の歴史ある日本排尿機能学会を大会長として開催させていただいたことが最近の活躍です。第1回神経因性膀胱研究会から数えると69回目で、47年間の歴史で初の女性大会長でした。自分の専門領域の学会に参加したり

発表したりすることは楽しく、経験を積むうちに参加するだけでなく企画し開催したくなりました。それを許してくれる土壌が日本排尿機能学会にあって良かったと思います。海外から演者を招請したり、非専門領域から排尿機能にも関連しそうな講演をお願いしたり、医学とは全く異なる分野で活躍されている人(私の心の師上杉裕世さん)をお招きしたりしました。シンポジウムやワークショップも幅広く企画しましたが、1年にわたるそれらの準備はとても楽しいものでありましたが、コロナの影響で準備が大きく躓き、それを乗り越える時間はとても辛いものでしたが、開催できた時は達成感がありました。

もうひとつ内的活躍は、4月から保険適用となった骨盤臓器脱に対するロボット支援下仙骨陰固定術の施設認定を8月に取得したことです。外部からは見えませんが、自分的にはとても達成感がありました。

女性は周りや失敗を気にし過ぎて、チャレンジする勇気が少し足りないかもしれません。でもやりたいことがあるのであれば“目標を高く持ち、まず始めること”が必要です。そして“それに向かうプロセスをおろそかにしない”(前出の上杉さん座右の銘、そして私の座右の銘になりました)ことが重要です。一方で、学会であれば参加するのは好きだけれど、開催することには興味がない。という女性も多いかもしれません。

“活躍”の中身は性別、勤務先、外向性、内向性などの性格によっても異なり、それもまた“多様性”でありますから、他人と同じである必要はないと思います。各人が自分がやりたいことを見つけ、ひと時それに邁進し、自分に自慢できる仕事をして下さい。一生懸命やっていたら、助けてくれる人も現れるものです。



第27回日本排尿機能学会を主催して(中央右が筆者)